

挑戦する心

岩月哲三

東亜建設工業株式会社
執行役員 土木事業本部担当



私が作業船に出会ったのは、東亜建設工業に入社した昭和53年であった。おりしも、昭和40年代の後半から日本各地で公害問題が発生し、埋立が公害の元凶であるかのようなキャンペーンが、マスコミや一部の学者によって行われるとともに、日本全体を襲ったオイルショックの波に翻弄されて、埋立工事量が激減し、「ポンプ船」の大半が非稼働の状態に追いつめられた日本のマリコン業界にとって最大の試練の時であった。

その頃、悪の象徴のように宣伝されたのが「ヘドロ」という言葉であった。事実、水銀やPCB、油などによる水質汚染が全国各地で発生し、社会的な問題となっていた。東亜建設工業も、いち早く、汚泥浚渫船を建造して有害汚泥の除去に乗り出した。ある意味で、「ポンプ船」からの脱却が、マリコン業界の新しい技術開発の幕開けともいえる。

東亜建設工業の諸先輩たちは、「ヘドロ」を除去するための新しい武器として、イタリアのシルシ社が開発した新型の「シルシポンプ」を購入して、様々な実験を繰り返し行うことで、汚泥浚渫船を開発していた。また、その時に習得した「シルシポンプ」の原理はその後、様々な形で応用され発展した。その中でも、空気圧送方式だけを取り出して、揚土用に実用化したのが、現在の「空気圧送船」となっている。

私が会社に入って最初に担当した作業船は、同じ「ヘドロ」相手でも、その頃新しく誕生した、「深層混合処理船」であった。海底の軟弱土（ヘドロ）をその場で固めてしまう作業船で、工法も新しく、作業船も手探りの状況の中、失敗を重ねながら次第に工事として完成させていった。「汚泥浚渫船」もしかしりであるが、文字通り「ヘドロ」まみれ、「セメント」

まみれになって、ひたすら頑張った。ただし、諸先輩は、私たちに決して弱音を吐くことなく果敢に挑戦する姿を見せてくれた。私にとっての作業船とは、まさに、新しい事への挑戦であった。そのことを教えてくれた多くの先輩たちに感謝である。

その後、私は大型地盤改良船を中心に作業船の建造に挑戦してきた。関空I期工事用の「12連装サンドドレーン船」から始まり、中空用の大容量管中固化処理船団、最近では、大型深層混合処理船等々を建造してきた。

さらには、「ヘドロ」を埋立用材に改良する「プレミックス船」そして、軽量土の改良船である「SGM船」建造等々へも挑戦した。

また、地盤改良船と並行して、環境に配慮した濁り対策用の「二重管トレミー船」を考案し、ダイオキシン除去用に超密閉グラブバケットである「スーパージェットバケット」も開発・製作した。

日本で「ポンプ船」が衰退した後に、悪の象徴であった「ヘドロ」と格闘することで、様々な工法が生まれ、多くの作業船を建造することができた。これも入社当初に、新しいものへの挑戦の心意気を先輩から学んだおかげであったと思っている。作業船は、一歩間違えると、とんでもない結果が待っているが、やりがいは人一倍である。私もそれにはまった一人である。実に作業船は面白い。

最近、作業船の新造が激減してきており、さみしい限りである。工事は減少したものの、挑戦する相手は無限にあると思う。挑戦とは、行き詰まりから始まる。行き詰まった今こそ、若い技術者は、新しい時代を先取りするような次世代の作業船の建造に挑戦してもらいたい。

海は広いゾ!! 大きいゾ!!